
魔法少女リリカルなのは 気楽に生きる少年

オワタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 気楽に生きる少年

【Nコード】

N4827M

【作者名】

オワタ

【あらすじ】

特に目標もやることも無く、けだるく生きていく少年の物語。

ある日を境にとんでもない魔法少女達に関わってしまい、今まで以上にだるい日々投げ出されることになる。

設定

これは、リリカルなのはの二次創作です。

この物語はオリ主ものです。

最強やキャラ崩壊等が苦手な方にはオススメしません。

設定は、A・S終了後です。

なのはが退院して、中学生になったあたりです。

名前：守蛇もりへび 宗蓮そうれん

この物語の主人公。なのは達の同級生。

幼い頃に事故にあい、目の前で家族が死んでしまう。

祖父母に引き取られて、海鳴に住むようになる。

中学に入る少し前に祖父母が事故に亡くなる。

ちなみに祖父母は病院を経営しているたので医学に詳しい。

常に「だるい」などが口癖で物事のほとんどに無気力。

タバコを吸ったり、酒を飲んだりしている。

不良に絡まれる事も多いので喧嘩に慣れている。

カルシウム不足で、怒りやすい。

躊躇いがなく、当たり前のように人を殴ったりもする。

父親の伝手を使って本物の銃火器、ナイフ、刀などを集めている。

こんな日常（前書き）

主人公達のキャラってこんな感じだったよね？
自信がないです、アドバイスを頂ければ幸いです。

こんな日常

中学生になった。

だるいが、ならないと高校にいけない。

高校を卒業しなきゃ安い金でしか雇って貰えない。

そんな理由でオレは学校に行っている。

だるいな、本当。

中学校に入って2週間ほど経つが、友達1人できやしない。

そーだよ、オレは、友達いませんよ。

なんか暗いとか根暗とか言われてますよ。

そんな悲しい事を考えながら学校に向かう。

「なのは、速く！」

「待つてよ、フエイトちゃん」

隣を元気な女子が走っていく。

その後を追って更に数人。

あゝあ、友達がいるって羨ましい。いやむしろ、妬ましい。

「パルパルパルパル」

などと呟きながら、学校につき校舎に向かう。

言っとくが自重しねえぞ？

けだるい授業3つが終わって、腹がすいてきた時に4時間目の体育ときやがった。

しかも体育教師が無駄に熱い奴だ。

「〜っと言うわけで、今日は男子女子混合のドッジボールをする！
異論は認めない！」

ちなみに『〜っと言うわけで』の前はこの教師の武勇伝とかそんなの。

そんなこんなで不満の声も無視されて、ドッジボールが始まった。
空はむかつくほど晴れてやがる。

「いくよ！アリサちゃん！」

「来なさい！すぐか！」

主に女子のテンションが上がっている。

男子は男子でアリサとか言う奴らを応援したりしてる。

うぜえ、だるい、サボりたい。

そんな事を考えながらコートに立っていた。

ボールに当たって外野に行けばいいんだが、あんな速い球とか軟球でも痛いし。

何で適当に当たろうとしたら、結構酷い目で皆見てくる。

つまり、避けるぐらいはしとけて事らしい。

とは言っても、滅多にこっちに来る事ない。

来る時はだいたい、こっちで奮闘してる女子がやられた時とか。

「アリサちゃん、アウト！」

「くっ、やるわね。すぐか！」

やられるなよ、終了時間までゆっくりさせてくれよ。

面倒臭くなりそうなので、さりげなくコートの中心に行って無防備な状態にいる。

こうしてれば、避ける振りしてわざと痛くないところにぶつければ楽が出来る。

最初はこれやったらリーダー格の女子に文句を言われるので、やられた後はこうして楽ができる。

敵コートでボールを持っているのは、金髪の奴。

名前は……何て言っただけ……？

とか考えて突っ立っていると。

「なのは、隙だらけだよ！」

「え！？フェイトちゃん、待って！」

どうやらオレじゃないようなので、リラックスしていると。

「わわっ！！」

とか、慌てる声が聞こえた左後辺りで誰かが転ぶ音がした。その直後、オレの顔面にボールがクリティカルしゃがった。

ほらな、だから言っただろ？

軟球でもこの威力はヤバイって。

力を抜いていたのもあって軽く吹き飛ばされた。

顔痛えな、転んだ後に自然に時計を見る。

あと25分も有りやがる。

面倒になったので、とりあえず立ち上がり。

「先生、顔面にボールが当たったせいで頭が悪くなったんで保健室に行つてきます」

適当に考えた文章だったので、どこかおかしい気もするがいいか。

それで、保健室に逃げ込み適当な言い訳をする。

「空にUFOでも飛んでないかなとか思ってたら顔に当たったんですよ」

「まったく、ケガには気をつけなるのよ」

入学してから逃げ出す為の理由として使っているので先生とは顔見知りだったりする。

最近では、わざとじゃないかとかって疑われるようになった。

そうですよ、大当たりです。

いち早く教室に入り、早弁をする。

コンビニで買った、『卵かけご飯弁当』をさっさと食い終わり机の上[↑]に体を預けてだらける。

数分もすると、皆が死地^{グラウンド}から帰還して昼食を始める。

オレは暇になるので、鞆からMHを取り出してやり始める。

こう言うのはな、見つからなかったら良いんだよ。

滅龍弾連射

浮岳龍を打ち倒せ

そんなノリで、G級を楽しんでいると。

「ちよつと、あんた！」

体育の時にテンションが高かったリーダー格の女子に声をかけられた。

「あんたよ！そこで、ゲームやってるあんたよ！」

うつわ、オレしかないじゃないか。

「来なさい」

これは、カツアゲですか？

「断る、オレはヤマさんと決闘しているんだ。これ以上、オレは大砲モロコシの製作の素材が……」

「はいはい、分かったから行くわよ」

首根っこを掴まれ強制連行される。

「待て、まだオレの滅龍弾の尽きてはいない！」

「はいはい」

「まだだ、まだ終わっていない！」

「うるさいからすずか、そのゲーム機も持っていくわよ」

「了解、アリサちゃん」

「待て！勝手に戦うな！せめて一時停止に！」

女子からは笑われて、男子からは殺気。

ふざけるなく、理不尽だ。

連れてこられたのは屋上だった。

「orz」

まあ、オレはへこんでいた。

「ああ、楽しみ方人それぞれさ。友達と狩るのもいいさ。悪魔なオトモを使うのもいいさ。」

チートでも何でも使うがいいさ。だって、それが人それぞれの楽しみ方なら別にいいんだ。

けどな、オレの楽しみ方は自分で狩り、自分で素材を集める事で、誰かにやってもらう訳には……！！」

「要するに友達が居ないんでしょう？」

この金髪女、人が気にしてる事を！

結論から言うと、月村すずかにヤマさんは狩られた。

神聖なヤマさんとの決闘を！

「嗚呼、ヤマさんと決戦をつけるのは帰ってからか」

こんな日常（後書き）

そう言えば、誰かない。

描き終わって感じるこの違和感。

なのは、フェイト、アリサ、すずか………？

あと誰かいたんだけど、誰だっけ。

アニメを見直ししてきたほうがいいかな？

夕方の出会い

オレはある事に気が付いた。

そう言えば、あいつらに更にもう1人いたよな？

ほら、あれ。

関西弁の、名前は何だったかな………？

「そう、確か………借金執事と同じ名前だったはずだ！」

結局、その日。彼は2期のメインでもあった『八神はやて』の事を思い出せませんでした。

教えてくれた、『ペペペー』様に感謝します。

心より感謝します。

ありがとうございます！m(´`´)m

ついてねえな。

ぼやきながら家に向かう。

機嫌を損ねると後でどんな報復があるのやら。

「面倒だな」

あの子の事だが、高町に紙を渡された。

名前と呼んだほうが、アリサちゃんも怒らないよ………少しぐらいは。と言われた。

いえ、少しぐらいでなく全く怒らない、むしろ仲良くなれる方法を教えて欲しいんですが。

主にオレの命を繋げるために。

つか、いきなりオレが。

「アリサ」

とか言ったら。

「名前で呼ぶな！」

とか言つてぶん殴られそうなんだけど？

まー、そんな明日の事は放っておいて、ヤマさんとの決着を！

「ただいま！」

誰もいない家にオレの声が響く。

自分の部屋に向かい鞆を置いてから、ベッドに寝転がる。

鞆からMHを出す気にもなれない。

「…………寂しくなんか無いぞ！」

しゅん

静寂

無音

虚しい

「すみません、嘘です。嘘つきました。実はかなり寂しいです。孤

独は嫌です、辛いです」

何て泣き言を言いながら、失敗に気が付く。

「あ、夕飯買ってない。今からコンビニに行くのは面倒だな……

……………」

本当についてねえ。

何で忘れてたんだろ？

いいや、久々に自炊しよ。

米はあつたよな……………？

お、レトルトカレー。

今晚はカレーに決定だな。

数分で準備が終わり、結局暇になった。

居間に行き、テレビをつける。

「なんか、やってないかな？」

『続いてのニュースです。昨夜……………』

どうでもいい。

ピッ！

『のように動物には……』
動物愛護精神なんてねえ。

ピッ!

『立て、ゴリラ! 3秒以内に立たないと頭ぶち抜くぞ? はい、1・
……』

? 何だったんだ、今のは?

ピッ!

『聞けえ! 冷戦はやがて終わる……』
演説?

ピッ!

『待っていたぞ、悟空』

再放送?

ピッ!

『キャッチ、マイ、ハート! ベリーメロン! ……』
メロン?

ピッ!

『我は、織田信長ぞ!』

さつきから、同じ声優さんばかりじゃないか?
もうやだ、何このカオス。

今日の放送は全部カオスなんですか。そうですか。

キッチンに戻って、カレーの様子を見る。

米はまだまだ、カレーもだ。

部屋に帰ってMHを取ってくるか。

そう思って部屋に帰ると、1人の少女が居やった。

ご丁寧に外靴で。

「おい、堂々としてやがるな。不法侵入は犯罪だぞ?」

「不法侵入?」

「そーだよ、ここはオレの家だ。さっさと出て行け、警察を……」

「……?」

あれ？この顔、どっかで？

高町つばいんだが、髪の色とか、瞳の色とか髪が短い。

「？　どうかしましたか？」

「いや、何でも……………」

でも、何でオレの家に高町のそっくりさんが。

「手に持つてるのは……………」

「闇の書です」

闇の書？

いや、そんな大層な物だったのか？

その本は数年前の春あたりに森で拾ったはずだ。

うん、森の奥で誰も近づいてこないような所にあった。

つつい、拾ってしまったんだが……………」

「何故、ここに闇の書があるのですか？」

「オレが拾ってきたから」

「何故、拾ったのですか？」

「気分」

「そうですね……………」

気まずい、やべえ。

呼吸が辛くなってきた。

「私は……………」

「ん？」

「星光の殲滅者です」

「物騒な名前だな」

とりあえず、タバコを口にくわえる。

「ならば別の名前を考えたほうがいいでしょうか？」

「頼むわ。長い名前で呼ぶのもだるいんで」

「分かりました」

「ふふふふ、あははははは！」

「はやてちゃん！ど、どうしたの？」

「はやて？」

親友の豹変振りに驚く。

「2人は良えよな？うちなんか、気づいてもらえなかったんやで？」

「え、そうだった？」

「でも、はやてはあの場に居たんだしさ、気づいていたんじゃない？」

「八つ当たりや」

「ええええええ！？」

夕方の出会い（後書き）

魔法介入が次回から始まります。
魔法も使えない主人公の対抗策は・・・

運命の出会い……だったかもな（前書き）

忘れはしない。

春、オレは彼女と出会った。

春の終わり、彼女との別れだった。

オレは決して彼女の事を忘れはしない。

運命の出会い……だったかもな

「マスター」

彼女はオレの事をそう呼んだ。

「マスター？」

「はい、この『闇の書』の今のマスターはあなたです」

確かに拾った、所有権はオレにあるはず（たぶん）だが。

「『闇の書』ってのは、それだよな？」

「はい」

「なら、オレは『闇の書』のマスターのはずだ。何故、あんたもオレの事をマスターって呼ぶ？」

「私は『闇の書』から作られた存在だからです」

「……なるほどね。できれば、詳しく教えてくれ」

説明中

「……ここで、そんな事があつたのかよ」

『闇の書事件』『その残滓から作られた自分達』この2つを語った。

「それじゃ、お前が高町にそっくりなのは……」

「はい、私は高町なのはを元に作られたからです」

おいおい、それじゃ……。

「高町やテストロツサや八神は魔法使いだったのか？」

「その通りです」

「はははは、もう意味不明すぎて笑えてきた……」
ソファアの上に寝転がり目を伏せる。

魔法使いなんてものがこの世に存在する。

しかも、数年前から身近な場所で事件があつた。

「夢物語すぎて笑えねえわ」

魔法なんてものも、身近に起きた事件も、全てが。

「マスターからも魔力を感じます。マスターは違うのですか？」

「.....」

まさか、気づかれるとは、な。

「違う、オレとあんたらは根本的なところから違う」

爺さん以外は気づかなかった。

だから、隠し通して生きるつもりだった。

こんな気味の悪い力、爺さんも隠すほうが良いと言った。

「.....まあ、それはいいさ。で、マスターとやらになった

わけだ。何か、やる事でもあるのか？」

「実は、闇の書から魔力が漏れ出していたのです。取るに足らないほどの微量でした。」

けれど、新たなマスターができました。その微量の魔力に何らかの変化が起こるかも知れません」

「ちなみに漏れ出した魔力つてのは、どのくらいなんだ？」

「闇の書の60ページ分です」

「多いよな！それ絶対取るに足らない量じゃねえだろ、微量つて言えないだろ！」

「.....おお!!」

「今更かよ、気づいてなかったただけかよ！」

「塵も積もれば山となる。こういう意味でしたか.....」

こいつは、バカなのだろうか。

「飯だ。とりあえず、飯にしよう！」

自棄になりながら大声を上げる。

「さあ、マスター。魔力の回収をしましょう！」

と、夕飯を食べて、皿洗いを終えた後、そんな事を言い始めた。

「回収つて言っても、どこへ？」

「この町に散らばっています。異変や事件を起こす前に回収したほ

うが懸命では？」

「賛成ではあるが、そもそも絶対に回収しないといけないのか？」

「怪我人を出すわけにもいきません、管理局にも関わりたくありませんので……………」

どうやら管理局が嫌いらしい。

「……………分かった。それじゃ、準備するから待つてる」

部屋に帰り、制服を脱ぐ。

「私服は……………黒の方が夜は目立たないよな」

着替え終わった後、倉庫に向かう。

大きめの木箱を退かし、地下の入り口を開く。

地下の階段の傾斜は緩く、転びにくくなっているため灯りがなくても安全だ。

地下の部屋には、さすがに灯りがある。

「さて、魔力とか意味不明な物にはこう言うのは効くのか……………
……………」

一番古い物は『火縄銃』、新しい物では『小型レールガン』まである。

親父のコネクションのおかげで、集める事が出来たんだが。

「まさか、使える日が来るとはな……………」

効かなければ、無価値なんだが……………。

森の奥でならともかく、住宅街などで銃声を立てようとするほどオレもバカじゃない。

「でも、警察に会ったら面倒だし……………これでいいや」

合計六本のナイフを取り、鞘に入れる。

極力目立たない、怪しまれない、見つかりにくい。

これを基準にした結果、ナイフしかなかった。

西洋剣とか日本刀とかあったけど、警察に見つかればアウトだからな。

何でこんなに詳しいか、と言うと。

爺さんと父さんの影響があった、とだけ言うておこう。

さて、外に行くか。

倉庫に鍵をかけ、家に戻ると庭に彼女はいた。

「よお、何やってんだ？」

「……この木が……」

「木？」

桜の木。

爺さんがオレが生まれた時に友人から貰ってきた、って聞いたことがあるな。

これを見る為に、爺さんの家に遊びに行く。

早い話が遊びに来てもらう為の理由を増やしたかった、という事らしい。

「……桜の木だな」

「何でこの木は1本だけしかないんですか？」

そりゃ、貰ってきたって言っても何本も貰えるもんじゃない。

いや、普通に考えると貰えること事態がありえないんだけどな。

「さあな」

説明がだるいので、誤魔化すのが一番楽だ。

「マスター、誤魔化しましたか？」

「まさか、オレがそんな事をするように見えるか？」

「見えます」

即答しやがった。

「ま、まあ。とりあえず、桜の木だ。出会いと別れの象徴だって聞いた事がある」

「……出会いと別れ、ですか？」

「そーいう事だ」

桜に興味を持っているようなので、邪魔をせず縁側に座りタバコを吸う。

その状態が、数分続いた。

「灰皿はどこだっけ？」

タバコを吸い終わり、灰皿を探していると。

「マスター、決めました」

「？ 何を？」

お、灰皿あった。と、タバコの火を消していると。

「私の名前です。サクラと言うのはどうでしょうか？」

「いいんじゃないか、お前に似合ってる」

「私に？」

「桜みたいに綺麗なところだよ」

「……………綺麗……………」

でも、これって間接的に高町を褒めてるようなもんなんだよな……………

……………。

「私、綺麗……………」

「それを言うと、全く違うモノになるからな。止めておけよ……………」

「……………」

「……………うん……………」

立ち上がり、体を軽く動かす。

「さて、魔力の回収に行くか？」

「……………はい、マスター」

「そんじゃ、頼むぜ。サクラ！」

「任せて下さい、マスター！」

こうして、オレの魔法への介入。

正確に言うなら、管理局と高町達への腐れ縁の始まりだった。

運命の出会い・・・・・・・・だったかもな（後書き）

うむ。何を書けばいいかわカラナイ。

次回は、魔力回収に向かいます。

文才に自信はないが見てくれると助かります。

夜の戦い（前書き）

始まりの夜。

初めての妙な予感。

初めての化け物との戦い。

初めての誰かと共に戦う事。

初めての誰かを信じ、共にする行動。

あまりにも、慣れてしまった斬る感覚。

夜の戦い

嫌な感じだ。

進むたびに嫌な感じは増していく。

頭の中は熱く、冷静さを見失いそうなのに……。

体には刺す様な寒気を感じる。

不気味な事に誰とも出会わない。

家の灯りはあるのに音が無い。

鳥の声も車の音も、何も無い。

少し歩いて、時計を見るが9時30分をようやく過ぎた。

普段なら、車もまだ通るはずだ。

家に帰る人も少くない。

「不気味すぎる……」

「近いのかもしれませんが」

なら、早く見つけて家に帰りたいもんだ。

この近くは、動物病院があったな。

そう、思い出しながら歩いていた。

道路に出る。

近くにバス停を見つけろが、最後のバスは既に終わっていた。

「やっぱり、車の一台も走っていないか……」

「………妙ですね……」

「どうした？」

「私は音が無いのも、誰も歩いていないのも結界が張ってあるかと思っただけです」

「結界？」

「はい、関係の無い人を巻き込まないようにする為に張るんですが……」

少し寂しそうな表情をする。

「今は、結界がありません。それらしき魔力の残滓も見つかりませ

ん

「それじゃ、今は『たまたま』誰も出歩いていないだけなのか？」

「……おそらく、それとも無意識に働きかけているのかもしれません」

オレ達は、また歩き続ける。

先程言った動物病院の前の道に出た。

「……！！」

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ。

今までに無いくらいの、嫌な感じがした。

「マスター？」

「……！！ 来るぞ！」

「……ッ！！」

サクラに向かって漆黒の爪が振られた。

「サクラ！」

「大丈夫です！」

形の無い、影だけの存在のような何か。

獣、犬のような、狐のような、爪と耳、尻尾、様々なパーツで作られたような何かだった。

「どうするんだ？」

「魔力に戻るようにするんです」

「ようするに？」

「倒すことです！」

サクラは漆黒の杖を構える。

「なるほどな、分かりやすい！」

ナイフをひとつだけ取り出し、逆手に構える。

「逃がしません！」

漆黒の球体が獣に向け、連射されるが容易く避けた。

「ゴオオオ！」

サクラに噛み付こうと、電柱を足場にして高く飛び上がる。

だが、宗蓮はそれを許さない。

投げられたナイフは、揺らぐことなく獣の腹を貫く。

「グオウ?!」

バランスを崩し背中から落下したにも関わらず、どこかが痛んだ様子も無く再び立ち上がった。

「来いよ!」

挑発にのり、一度距離を取って走り出す。

獣を迎え撃つように宗蓮も走り出た。

「危険です!避けてください、マスター!」

その言葉を無視して、全力で獣に向かって走る。

獣は、宗蓮の首を噛み砕こうと約2メートルの距離で跳躍した。

「グオオオオ!!!!!!」

瞬間、ナイフは獣の顎に突き立てられる。

獣の爪は僅かに宗蓮の髪をかすめた後、そのまま空を裂く。

ナイフは顎から尻尾までを両開きに解体するように奔る。

切り裂かれた獣は、咆哮を上げ崩れ去った。

オレ達は、驚いていた。

「(こんなにも弱いものなのか.....それとも、オレ自身

が.....?)」

「(これは、PT事件で高町なのはが最初に戦った.....)」

崩れ去った獣は、光になりサクラが持っていた本に吸い込まれた。

「終わりだよな?」

「.....はい.....少なくとも、今夜はこれで終わりか
と思います」

いつの間にか、世界は音を取り戻した。

近くの家からは喧騒も聞こえ、車の音も聞こえ出した。

「本当に結界じゃなかったのか、こんないきなり全部戻ったような
感じなのに.....」

「はい、少なくとも……!」

突如、服を掴まれて電柱の影に隠れさせられた。

「お、おい!どうし……むぐっ」

口も押さえられた。

「しっ!マスター」

さっきまで戦っていた所に1人の少女が現れた。

「(……あれは、高町?)」

聞き耳を立てると、僅かに声が聞こえる。

「うん、何もないよ。レイジングハートも魔力は感じるみたいなんだけど……」

辺りを見回している。

「ま、マスター。その、えっと、都合が悪いので、撤退します!」
そう言つて、本ごと消えやがった。

オレは引つ張られていた力がいきなりなくなり、転んでしまう。

「! 誰!」

「大きな声を出すなよ、ご近所迷惑だろ?」

「え、えっと……蛇君?」

「覚えにくいか?オレの名前は、そんなに覚えにくいのか?」

「にははは」

「笑つてごまかすつもりか、貴様?」

「いや、そんなつもりは……! それは……?」
血の気が引いたようにオレの持つている、ナイフを見る。

「これは手品の道具だ。最初の自己紹介で特技は手品ですって言っただろ?」

「そ、そう言えばね……」

嘘である、オレの自己紹介は。

『守蛇宗蓮だ、以上』

テンション低くそれだけ言つて終わった。

「そう言う高町こそ、何やってるんだ?」

「え、えっと。それはね……」

ごまかす為に考えてやがるな。

「まあ、コンビニに行ってたオレが興味を持ちそうな話題ではない事だけは確かだけだな」

「そ、そうそう。そうなの、特にすごい理由とかでもないの」

「ふ〜ん、それじゃ帰るわ」

「うん、バイバイ！また明日ね！」

「おお〜」

気の抜けるような、声で返した。

今日は眠かったので、家に帰りそのまま寝る事にした。

そう言えば、サクラの奴はどこなんだろう。

ま、放置してもいいか。

夜の戦い（後書き）

こんな感じで、駄文ですみません。

学校 夜の魔力回収 学校の繰り返してでいこうと思います。
次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827m/>

魔法少女リリカルなのは 気楽に生きる少年

2011年1月27日03時58分発行